

## 音楽と旅と

「音楽って、その場にいる人が誰でもかけがえのない参加者になる理想の関係をつくってくれるじゃないですか」

小学校二年生のときからピアノを習いはじめ、アメリカではジャズバンドで「サクセスが上手なやつ」になることでみんなの仲間入りができた。高校ではドラムを叩いていた。

「楽器一つを道連れに世界を旅しながら生活できたらいいなと思ったこともあります」

高校に入るときに寮生活を選んだのは、早く自立したい、行ったことのない土地にひとりで行きたい、という思いからだ。

仕事も含め、これまでに訪れた国はおよそ四十カ国。観光名所には行かない。誰も知らないような村を歩く。そして、その土地に固有の素晴らしさを見つけると「生まれてきてよかった！」という思いで胸がいっぱいになる。大きな荷物を背負って裸足で山道を下るネパールのおばあちゃんたちの姿は、とても美しい。イラク戦争からの復興を目指すバスの街に住む人々は、誰でも仲よくなる明るい性格の持ち主が多かった。モンゴルで遊牧民のゲルに居候したときは、「人間、これだけで充足して生きていけるんだ」と思った。メガソーラーで電力を供給しなくても、個人個人の太陽電池でいい。何がなくとも、なければないで、人は生きていける。

「なんでもない日常のなかにこそ、ほんとうの魅力が眠っているんです。そこにしかない美しいもの、その場にしかない魅力を見つ



## 世の中から 関係ないを なくす

こんどう ゆうき  
近藤 祐希さん

WORLD FESTIVAL Inc. 代表

1986年、大阪生まれ。小4のときに父親の転勤に伴いアメリカに渡り、現地校の中学を卒業するまで西海岸オレゴン州に住んだ。その後は単身で東海岸に移り、慶應義塾ニューヨーク学院の寮に入った。慶應義塾大学総合政策学部を卒業後、大手レコード会社で数年働きながらNGOやボランティア活動などに接して独立を決意。「世の中から“関係ない”をなくす」は、代表を務めるWORLD FESTIVAL Inc.のミッションである。

<https://www.worldfestivalinc.com>



けて、表現して、伝えて、それを見る人にも  
発見してもらおう。僕が伝えたいのは、それぞ  
れの、そこにしかない幸せなんです」

もちろん、なかには身の危険を意識する必  
要がある土地もある。

「ここから先は踏み込んではいけないとい  
うことには敏感です。空間的にこの道を越え  
てはいけないという目に見えない線も、心理  
的にこれ以上相手の懐に入ってはいけないと  
いう境界も、はっきり見えます。でも、『あ  
なたを警戒してはいないよ、好きだよ』とい  
うメッセージを全身で発しながら物理的に近づ  
き、笑い合うと、いつきに友達になれます」

## 9 / 11を体験して

アメリカで同時多発テロ事件が起こったと  
き、彼はニューヨークにいた。その後、続い  
たイラク戦争を見て、「なぜこんなことにな  
るのだろう」と疑いが膨らんだ。西海岸の現  
地校ではさまざまな背景の友達がいた。クリ  
スチャンの友達とはいっしょに教会に行っ  
たし、ムスリムの友達の家に遊びに行ったこ  
もある。彼らに起きることは、ひとごとでは  
ない。大切な人がいる国は、自分にとっても  
大切だ。

「互いに相手のことを知らないのに知った  
かぶりをするから分断が起る。『関係ない』  
と思うから、相手を悪く言えるんです。だか  
ら僕は互いにほんとうのところを知る『関係  
をつくりたい』」

彼にとつては日本もアメリカも「よいところ  
も悪いところも知っている大事な国」だ。悪い



2018年、アフリカ・ガーナでの撮影風景。カメラを構えているのが近藤さん。



8年生のとき現地校で。前に出てサックスを吹いているのが近藤さん。

ところについては「バカだなあ」と思いながら、  
あくまでも親愛を込めた目で眺めている。新  
しく「いいところ」を発見するとうれしくなる。  
「僕は、文化と文化の間にいることが好き  
なんです。カオスというか交差点。そこにい  
ると居心地がいいし、みんなここに来ればい  
いと思います。ここにいれば視野も広がるし、  
視点も増える。異なる文化の人と触れること  
で互いの魅力を見つめる経験をしてほしい」

## ◆関係を見つけてもらうために

WORLD FESTIVAL Inc.では、世界各  
地の国際援助や教育支援の現場で映像を撮っ  
てくることが多い。さまざまな国で近藤さん  
たちが実施している、子どもたちが集まる  
「祭り」は、にぎやかで笑顔が素敵。

だが近藤さんは「映像制作会社ではないん  
です」と強調する。映像や音楽などのエンタ  
ーテインメントを通じて出会いを生み、橋を  
かけ、関係ないをなくしていくのがミッシ  
ョンだ。「映っている人の」パワーを感じた  
とか、「世の中の見方が変わった」とかの感  
想がうれしい。だから日常の生活のなかでも  
そうした感動と出会う場をプロデュースした  
い。国内の大手書店や大規模商業施設とコラ  
ボレーションしたこともある。「空港や駅で  
何かできたらいいですね。偶然の出会いで発  
見してもらえれば」と言う。

会社自体が世界各地に拠点を増やし、多国  
籍の祭りのような、文字通り「WORLD  
FESTIVAL」(にぎやか)でも理想の一つだ。

(取材・文 古家淳)